

# 人間山水図巻

吉川英治

青空文庫



たれかがいま人間性のうちの「盗」という一部分を研究対象としてみたら、近頃ほどの資料に豊富な世間はないだろう。暗黒期といわれた過去の応仁、永正の年代でも、よも今日ほどであったかどうか。だがこういう国家状態のときのこうした現象は、人間の住むところ洋の東西を問わないようだし、またこんな混濁こんだくの底から実は必死な次代の良心が萌芽ほげしつつあることも、史に徴ちようせば期待されないことでもない。

明日あすは何うなる世かと、時の人々を暗澹あんたんとさせた応仁、文明の下からでも、たとえば足利水墨あしかがすいぼくの絵画や、後の生活様式を規矩きくする工芸が生れていたし、五山の宗教や社会道義の真摯しんしな自覚もうながされていた。珠光しゆこうも一休いっきゆうも雲舟せつしゆうもそうした「闇の世代」の人々ではあった。だから一概に今を悲観するにはあたらないし、世相の「悪あく」だけを見て、見えない「善ぜん」を否定するのは、過去において「善」のみを肯定して一切の「悪」を無視したのと同じ間違いの因になろう。むしろ、裏悪りあくの世よりは、表悪裏善の今日のほうが良い未来を約す可能の多い世といえないこともないのである。

いやでも応でも、宇宙は刻々に易かわるといふ法則に立つ易学を生んだ隣邦りんぼう中国では、さすがに世の転変てんぺんには馴れぬいていたものか、古来盗兇とうじゆうに関する挿話そうわは今の日本にも負け

ないほど多い。日本でも年表にしばしば出てくる奈良、平安朝の「諸国に盜賊蜂起ほうき」の時代から、つい近世の野武士や押込み流行などの頃まで、世がみだれれば必ずその出現はあつたことであり、中国とは正に弟ていたり難し兄けいたり難しといつてよいかもしれない。だが何といつても、緑林の徒の横行ぶりも、中国には一日の長がみえ、またどこやらに愛あい嬌ようがあつたり、その一部人間性にたいして寛大な風があつたりするのも中国である。盗児をさして梁りよう上じようの君子とよんだ文化人は欧羅巴ヨーロッパにも見あたらぬようだ。世の中がよくさえなれば彼等の大部分は良民に回るはずのものだということを、中国のひとは易学的に自然達観しているのかもしれない。日本にしても、悪に強ければ善にも強いという言葉があるくらいだから、つまるところ両国の盗児観は、世の中次第——という点で結局一致しているものとも考えられる。

前措まへそきが長くなつたが、私のこの小篇は、そんな社会課題をとり上げたという程な作ではなく、稀 《たまたま》手近な書から宋代の緑林挿話の小素材をひろい上げ、それに些いささか潤色を加えてみたまでのものである。

北宋ほくそうの世は百六十年もつづいたので、長く北宋に仕えて、生れながらの家門や栄達の保証たのに恃たのみきつていた宋家の朝臣や武人たちは今更のように、国の興亡こうぼうとはこんなにも脆もろいものであつたかと痛感しながら、落魄うつろびれた身を一変した世の巷ちまたにさまよわせていた。

蕭照しょうしょうもそのなかの一人だつた。

彼は、徽宗皇帝きせうの全盛時代からの御林軍の一将校であつたから、その拠よつて来た禁門の守りは、天地くつがが覆くえろうと易かわるものでないようにおもいこんでいたものだつた。ところが、一朝にして宋は金きんに亡なげられ、四都ことごと悉しく金きんのものとなつて、北宋の旧軍官人たちは、生きるだけの身をかくすにさえ、この大陸がせまい世になつてしまつていた。

『まだここに盗み残されている俺というからただだけがある……』

窮きゆう 乏ぼうもこうまでになると——これより下には落ちようはないという——肚はらのきまつた自嘲じちやうが彼を落着き払はらわせていた。

河南の都から北へ北へと落ちのびてくる途中何回となく土匪どひや流賊りゆうせきに襲おそわれて、家財も家族も身に着けていた物も、すべてを剥はぎとられてしまい、残つたのは、裸はだかに近い一箇いの肉体だけであつた。

部落を見かけると、何とか小屋でも建てて耕作する一畝せの土地でもないかと落着き場所

を求めたが、ぜいたくな望みで、小屋はおろか、その時々を胃をしのぐ一握りの黍も犬の肉すらもありつくのに困難だった。

『隣りの県へ行つてごらんなさい』

と親切に教えてくれた農夫もあつた。この県は戦争中の取立と近年にない飢饉とで、見た通り鶏の啼き声一つしなくなつているとも云つた。なるほど蕭照はいやが上にも荒涼たる感を抱かせられ、更に数日を隣県の方へあてなくあるいていた。

すると県境の河を渡つてくる葬式があつた。数名の男が柩をかつぎ、巾着を持って、彼の側をすれちがつた。

『ははあ、殊によると、彼等は例の類かもしれないぞ』

彼は多少文字を解す男なので、かつて書物で読んだ唐時代の世相をふとおもひ起した。

それは「柳氏叙訓」という書に見たことであつた。著者の柳公綽が、襄陽

の民政監察官として、その地にあつた時の見聞を自記したものである。折しも襄陽は凶年だったが、隣の県はもつと窮迫を極めていた。

一日、喪服を着た者が、役所に来て、慟哭しながら、願書と共に口でも訴えた。

（私は、先祖思いなので、先祖十二人の棺を、郷里から武昌の家の方へ移そうとおもひ、

せつかくこれまで運んで来ましたが、分らずやの川番役人共がどうしても許可してくれません。どうか改葬のための通行証をお下げ渡してください)

(そうか、川番役人は、そんなに分らずやか、わしが行つて裁いてやろう)

公綽は、役所から警吏(けいり)を連れて行つて、直に、十二箇の柩をかついでいる男たちを捕縛(ほぼく)してしまつた。後、棺を破つてみると米がいっぱい詰込んであつた。いう迄もなく、これは穀物禁輸(こくもつぎんゆ)の布令を破つて、隣県に米を流し、巨利を獲ようと計つた闇屋たちだつたのである。

著者の公綽は、どうしてこれを一見して観破(かんぱ)したかを、その書では、得意な民治体験として記(しる)しているのであるが、いま蕭照の空腹にとらわれている頭をかすめたその記憶からは、まったく質(ことな)の異なるものが考えられていた。

『おい、待て』

彼は、駈(か)け戻つて、やにわに、葬式の前に立ちふさがり、

『お前達は、闇屋(やみや)だろう、棺を下ろせ、棺の中は、米にちがいない』

と、御林軍以来、久しく忘れていた声を出して、脅しにかかった。

すると、柩のそばにいた男が歩いて来て、彼の肩を打ちながら笑つた。

『蕭照じゃないか、よせよ、そんな真似は』

『やあ……』と、蕭照は忽ち悪党ぶツた見得を失つて、どぎまぎと相手の顔を見まもつた。

『……おどろいたね、君か』

『君でもないものだ、御林の旧友を、恐喝するやつがあるものか。北宋は亡び、金の南宋となつて、年号も建炎二年と革まつたが、おたがいが流亡してからでも、考えてみろ、まだ一年と少しか経つていやしないじゃないか。いくら世の中が變つたからといって、友達の顔まで忘れなくてもいいだろう』

『けれどこんな所で、君に会おうなんて……しかも君の姿だつて、まったく前の君とは似てもつかないし』

『それやそのはずだ。何しろあの峨々たる大行山脈に住んでいるんだから、俺だつて、かなり野性に返つたろうさ』

『へえ、あんな山の中で、何をしているのだい』

『訊くだけ野暮だろう、近頃、大行山の名物といえは、誰だつて、山賊というじゃないか』

『ふーむ……。君が？』

『なにを蔑むのだ。貴様だつて今、出来心だろうがおれたちを土民の闇屋と見て、その弱



身を恐喝しようとしたじやないか』

『あやまるよ。何しろもう曠野こうやに日は落ちかけているが、わが胃ぶくろには入る物のあてもない』

『ははは、心細いことをいうなよ、まあ来い、大行山へ』

この男は、夏駿かしゆんといつて、共に御林にいた頃は、すこしも曲がった事はきらいな、剛直ともおもわれた人物だったのに、それが山賊になったとは——どうしても蕭照には信じられない気がした。そのくせ自身がふと抱いたさっきの怖ろしい決意には、さしてふしぎとする反省も覚えられなかった。

山の途中へ来て一泊した。宿とした無住の山寺では、山門の聯れんを割り本堂の木像まきを薪まきとして、夜もすがら暖だんをとった。かついで来た例の柩ひつぎからは、肉でも酒でも何でも出て来た。もちろん皆、里から盗んで来たものばかりだと、夏駿は事もなげに云った。

『深い山だね、いったいいつ山寨さんざいへ着くのだい』

『なあに、明日あしたは朝のうちに着くさ』

『宣和せんなの徽宗皇帝のときから仕えていた將軍の岳飛がくひが、やはりこの大行山にたてこもつて、折々、金の治下となつた地方を悩なやましていると聞いたが、君もその一党かね』

『そんな噂はよく聞くが、岳飛がどこにいるか、この山にいても少しも知らぬ』

『大行山は大きいなあ』

『いや大きいのは、どうでもこうでも移り動いてゆくものの力だよ。春から夏へ、秋から冬へは、誰にでも豫測されるが、もつと大いものの必然な推移は、おれたち小人には皆目分らないものだから、遂にこんなにあたふたな目に遭ってしまったのだ。まあまあ北宋もあれでよく百六十余年もつづいたものさ』

『だが、宣和の盛時に生れたら、誰だつて、万代不易とおもうじやないか』

『ばかをいえ。あんなに宋の四都ばかり繁栄を極めて、それ以外の広い黄土の民が、そういう迄、王朝の軍官市人の栄耀のために、虐げられたままでいるものか。北宋の朝は、歴史では、金に敗れたとなるだろうが、実は疾くに自分自体で敗れていたのさ。遠い前の、唐、晋、後漢、前漢、秦、周——の前例どおりさ。よくも人間てやつは分りきったことを次から次へくり返しているものだ』

『まったく、諸国から出た皇帝が立ち皇帝に亡ぼされ、そのたびに何億という人民の膏血で築かれた皇城が一夜の灰燼になってしまっている』

『年号ばかり、建炎と革めても、金の皇帝がまたそれをやれば、同じ轍をくりかえすに決

つている。ただ長いか短いかだけだ』

『いくら精鋭な衛林えいりんの軍と高い城壁で守つてもだめかね』

『そんな事に力を入れれば入れるほど滅亡の日を確約するだけのことさ。なぜならばそれは皆、人民の犠牲によらなければできない事だ。しかもその中には、自然天下の財宝をあつめ、逸楽いつらくと権勢だけに生きようとする人間ばかりを保護する制度ができてしまう』

『が、朝威ちやういを振わなければ、人民が伏すまいし』

『それが崩壊ほうかいの因もとだよ。この世で形あるもので滅しないものって何一つあるか。あるとすれば、形の無きものでなければならぬ。だから出来ない相談みたいなものだが、不易ならんとすれば、人皇の左右へ、財宝なんぞ置いてはいけないのだ。それを王宮といえ、後宮三千の美姫びき、金銀財宝の山を想像させるような、朝威を形づくったから、何遍だつて滅ぶほろぶのだ。当然瘦土そうどの飢民ききの眼からは、常にそこは大きな物質の対照にされるだろう。従つて、乱が兆すきざと忽ち業火ごうかと掠奪りやくだつのうき目めにあい、この世ばかりか、その追及は、地下百尺まで追いかけてゆくじやあないか。——なぜならば、何たる因果か、王家の墳墓ふんぼといえ、柩ひつぎの中まで珠玉しゆぎよく珍宝ちんぼうを詰めこんでゆくものだから、秦朝の墳墓ふんぼとい、漢室の墳墓ふんぼとい、王妃の墓で発掘あばかれていないところは無い位だ』

『すると、君もいかんことになるね』

『なぜ』

『柩に財宝を入れて担ぎ歩いているじゃないか』

二人は大笑いした。手下の者は、炬のまわりに早や寝ころんでいた。

『おい、夏駿。ほかの者が寝こんだらしいから云うが、君はいつたい、どういう量見  
で、泥棒なぞ始めたんだい。よも、本性じゃあるまいが』

『誰が泥棒なぞを好きこのんでやつてる奴があるものか。だが、仕方がないじゃないか』  
『生きるだけの為なら、何とか思案しあんがありそうなものじゃないか』

『じゃあ、蕭照しょうしょう、おまえには思案があるかい』

蕭照は、返辞に困った。

夏駿は偽りのない様子でまたこう云った。

『おれひとりならと思うがね……そこらにごろごろ寝ているのも、みんな流亡のあわれな  
身の上ばかりの寄り集まりだ。これやあ、どうにも、世の中のせいらしいぜ』

『世の中というのは、べつに有るわけなものじゃあるまい。ここにいる人間の世の中とは、  
ここにいる人間同志の作っているものだからな』

『そんな事はない、何たって社会がわるければ、俺たちも、善くは住みかねる』

『だからもつと住みよい、良い世の中を作りたいたいものじゃないか』

『それはたわ言だ。考えてみる、俺たちはもう南宋の社会からは容れられない人間だ。こうして深山に潜んで喰いつないでゆくのがせきのやまじやないか』

『どう理窟をひねっても、泥棒をやつても仕方がないとする理由は見つからないね。何しろ自分が生きるために、果てなく人を犠牲にしてゆくんだからな』

『分つてるよ、分つてるよ、うるせえなあ』

氣にさわったか、夏駿は、獐猛な顔をして見せながら、仏像の頭を炉の中へ燻べこんだ。煙りの中に屈めこんだ友の肩から横顔に、蕭照は、人間というものが、極めて短い年月のうちに何千年も前の非文明時代の野性に忽ち立ち回るものだという事実の影を見たような気がした。

だがそれから、大行山の山寨に、百日ほど同居しているうちに、そんな自覚は持った覚えもないような野人にまで、彼自身も成っていた。つまり蕭照もいつのまにか、平気で旅人を掠め、里に降りては風の如く、人家を荒して去る盗賊の一箇になりきってしまったのである。

ところがその後間もなく、頭の夏駿が、強い旅客に出合つて、旅客のために、反対に斬り殺されてしまったのである。前身が前身だけに、そこで自然、蕭照が次の頭にあがめられていた。

こうなると彼も今はもう大行山中の大盗の頭目として、悪業の足を洗うことはできなかつた。いや真面目な業に帰ろうなどとは思つてみることもなくなつた。

と、或る年の夏。山寨の下の古寺から、手下共が、ひとりの旅人を捕まえて引っぱつて来た。

『なんだ、こんな薄汚ねえ老いぼれを』

蕭照は、張合いのない顔をした。下の山寺は、ともかく屋根や荒壁はあるので、山中の旅人がよく雨露をしのぎ、折々、居ながらにいいものを獲るのであつたが、今朝のは、面ざしは上品な老人だが、ろくな持物はなさそうだし、衣服を剥いでも、彼の慾をみたくには余りに不足だつた。

『まあいい、裸にしてみろ』

億劫そうに、彼は腰かけながら見ていた。手下達は仮借なく老人の衣服を解きほぐした。老人は彼等のなす儘にまかせ、子供のように素直だったが、ただ一つ、きたない、

囊包みだけは、手に抱いて離さなかつた。

『そいつを奪つてこつちへよこせ』

蕭照のことばに、荒くれた腕ぶしが、老人の拒みをヘシ折つて、その囊をお頭の手へ移した。

『おや』

この山で見た事もない品がその囊から出て来た。何本かの画筆であり旅硯であり絵の具であり画冊であつた。

『爺さん、画描きかい、お前さんは』

『うむ、そんな者じや』

老人は、毛をむしられた鶴みたいにふるえていた。が、そのくせ微笑んでいるような温顔でもあつた。

『旅絵師というやつかね』

『これでも、徽宗皇帝さまの世には、宣和画院のひとりでしたよ。待詔金帯を賜わつてのう』

老人の眸は回顧をなつかしんでいた。前北宋の画院にいた帝室技芸員の一人と聞いて、

蕭照も何だかむかし話もしたくなつたらしく、

『そうかい、そいつは奇縁だな、俺も実は、御林ぎよりんの兵隊だった事もあるんだ。おいおい着物を返してやれよ、そんなボロを奪つてみても始まらねえ』

それから蕭照は、こつちへ来いと、山寨の中へ彼をつれこんだ。そして酒をのませ粥かゆなど食べさせてみると、この老人のはなしぶりや態度には、どこか飄ひようこ乎こたる風があつて、わざとらしくなく、また慾よくとく得とくもなければ愚痴ぐちもなく、聞いていて清流に耳を洗われるような気がした。

『大行山も、この辺りは、もつとも景がよろしい。李思訓りしくんの山水画でも見るようじゃ』

『へえ、どこがね』

と訊き返してから、蕭照はふと、以前の自分には多少あつた書卷しよかんの智識を、久しぶりに身に思い出そうとしてみた。が、そんなことを努めてまで話しているのは面倒にもなつて、

『この辺の景色がそんなに気に入つたなら、幾日でも泊つてゆくがいいさ』

と云い放した。そしてその晩以後は、この老画師ろうえしが山寨にいるかないかも忘れていた。が、稀 《たまたま》、彼が念頭にない老画師の姿を、おおまだ居たのかと、見かける



時は、老画師はいつも画冊と絵筆を手にして、山を写し、けいりゅう溪流に見み惚れ、まったく自然の中に溶け入っているような姿の人であった。

『よく飽きないものだな』

折には、蕭照も、絵筆の手元を、のぞき込んでみたりしたが、何の感かんきよう興も共にすることはなかった。

老画師はそのうちに、自分から下の山寺へ居を移し、その後は、この山寨で見かけることも稀れになった。手下達は、やがて老人が食物を貰いにも来なくなったので、何を喰って生きているのかといぶかり合っていた。

秋の一日、あるひ蕭照は退屈まぎれに、老画師の生活を窺うかがいに行ってみた。山門の下の狐狸こりも棲すめないような小堂をいつのまにかきれいにして、老画師は、茶を煮にていた。

『これはおめずらしい。さあお入りなされ』

長いこと忘れていた人間づきあいの世間的なことばを、蕭照はふいにここで聞いたような気がして、あいさつにつかえた。

が、とにかく入ってみて、そこらを見廻すと、碗わんといい炉ろといい卓こといい、元より形ばかりの清貧だが、とにかく一高士の隠いんせい棲ともいえる清潔さを保って、わけて文房具など

はちまちまと持主の賞愛をあらわして飾り並べてあつた。

『老人、どうしてあんたは此の頃、山寨へ喰べ物を取りに来ないのかね』

『いや、近頃はの、麓の衆が、よく喰べ物をくれるのでな』

『へえ……里から？』

『絵を欲しがつてな、子どもら迄が、どうかすると遊びにくる』

『ほんとかね』

『わしとて、喰べずには生きておられん』

蕭照は信が措けなかつた。なぜならば、里の者はこの山中を、盜賊の巢と知っているはずだからである。——嘘でもない気がしたのは、事実老画師が山にはない茶を煮たり、こうして生きている事実だった。

『そんな怖い思いをしても、お前さんの絵をここへ貰いに來る馬鹿があるのかなあ』

彼は、それを知らなかつた自分が、里の者から威を擲揄されている気がしたので、毒づきながら、そばの壁に貼つてある一つの絵をじろと見つめた。

眼の前に、老画師の煮た茶の香りが置かれ、老画師は客にかまわずまた絵筆をもって、べつな試作に他念なくとりかかつていた。

『……………』

蕭照の心にふと自然の何かが映った。その自然美の中に住んでいながら今まで少しも眼にも心にも映じたことのないものが、どうしてなのか、老画師の絵筆を通した紙の上に初めて彼は観せられたのであった。

飽かずに半日ほど、飽かぬ絵筆のさきを、眺めてしまった。

そしてやがて山寨の方へ向って独り帰るさには、今日まで彼が見つつも見えなかった大自然の美が、生れて初めて見たもののように見えた。

『……………はてな?』

その晩、寝ながらも思った。

ひとりの老画師の所には、求めないのに食物が運ばれ、山寨の大男の群は、常に人間の血が号泣に出逢うのを忍ばなければ生きてゆく糧が得られないとすると、……………これはすこし意気地がないぞとも考えた。

こうして寝ているまも、おれは今日まで出会って来た無慙な人間の断末の形相やわめき声が、ともすれば夢寐にまでつきまとって、寝ざめのよかった朝とてない。それにひきかえ、あの老画師のにこやかさは何うだ、いつ会っても玲瓏と笑えるあの顔は羨や

ましいものである。——なるほど絵というものもおもしろいものだが、何よりは老画師のあの顔は、自分たちの仲間のうちには類のない顔だ。

そう思うと、彼は自分の醜しゅうあく悪あくな人相がおもいやられた。初めて山寺の炉べりで友の夏駿の顔に気づいたあの相貌そうぼうが、今の自分にもあるにちがいないと思った。

『また来ましたよ』

翌日もつい蕭照は老画師の小堂を訪れていた。そしてまた熱心に見入っていると、

『画は好きかの』

と、この老画師としてもめずらしい初めての問いを彼に向けた。

『さあ、嫌いでもないようだな。こう見ていられるところをみると』

『少しずつ、習うてみなされ。どうじやな、今日からでも』

『とんでもねえこった』

彼は彼自身を侮蔑ぶべつして平気だった。

『絵なぞ描けるくらいなら、何も粹すいきよう狂きやうに、こんな山の中で泥棒なんぞしている奴があるもんか、このがさつ者の不器用者にや、とても、とてもよ』

『そんな事はない』

老画師ろうえしは、真面目である。そして云うには、人間の本能のうちには、盗み心だの、残忍性だの、あらゆる悪魔的なものも、当人が自覚するとしないとにかか関わらず潜んでいるが、その反対なもの、善真なもの、たとえば絵心のごときでも、実は誰にでも必ずある筈のものなのだ。それを、描けるとか描けないとか、まず後天的な智恵を以て自分を批判し去つてしまふから描くべき性能を出し得ないまでのものである。——もしほんとに眠っているよい本能をゆり起して、素直にそれを現わすしやうじん精進しやうじんをするならば、反対な悪の本能をよびさますように、それも必ず磨き出されずにはいない。悪をふるい起すほどな善性の屈伏力を以て、善のために悪を抑止よくしするの忍耐をもつたなら——もちろんその理性の堅持けんじはやさしくはないが、ひとり画道にかぎらず何らか人生の明るい彼岸に達しられないはずはない。——とわしはそう思うがと、老画師はいちど語を切つて、静に、風炉ふうろの上の瓶かめから茶を注いで、蕭照にも与え、

『実をいえばな、こう見えるわしにだつて、折々には、決してよい料簡りやうけんばかりが起りはせぬ。この年になつても、旅路に飢うえたときにもなると、ふとおぬしと同じような人間になる——瞬ひびもある』

蕭照はそういう老画師の面を穴のあくほど見た。この人にしてもそんな心になる折もあ

るのかと疑った。またそれをかりにも行為の上に出さずに来た人間の心がけによる美しい姿というものを初めて知った。寺の木像は割つて薪にしても、今の悔恨かいこんとはしないけれど、この人を一度でも裸にして脅した罪は怖ろしいと思われてきた。

『じゃあ、こんな年をした……この蕭照にでも』

云いかけるうちに、彼の気もちは、二十年も前の少年に似た素朴な在り方に似たものとなっていた。その口から、あらためて弟子入を乞うことばが、われともなく迸り出していた。『よいとも、身を入れて、教えよう。好きな道じゃ、わしには何の荷にもなりはせん』

老画師は、彼の師たることを約した。

師弟となつて後、蕭照は初めて、老画師の名を知った。李唐りとう、字はあざな古きこといい、かつては書院の巨匠朱銳とか李迪りてんなどと並び称されたほどの画人であった。

蕭照は、この人を知ることの遅おそかったのを悔いた。彼は初めからこの老画師に害意はもたなかつたものの、また好意の片鱗へんりんも持たなかつた。むしろ宣和書院の一員と聞いたときは、むかど、唾つばでも吐きかけてやりたいような衝動しょうどうすらあつた。それというのが、こういう柔弱にゆうじやくな文化人共が、徽宗皇帝きせうをとり巻いて、皇帝をしてまるで一箇の画家か美術の保護者みたいなものに仕立て上げてしまったからこそ、ついに北宋を亡ぼしたので

ある、そして自分たちにいたる迄、こんな流亡の憂目うれきめをみるに至つたのだという日頃の憎ぞ悪うおを以て、この李唐をも、頭から軽蔑けいべつしていたからであつた。

——が、いまその非を覚つた彼は、その日から師の李唐の側につきつきりて侍かしずいた。朝夕は水を担にない薪たきぎを割り、また師の絵えを携たずえて里あたに行つては、絵を食物に換えて歸つた。ふたつの道は歩けなかつた。彼は山寨を解散した。手下たちも、蕭照がつき当つた道にいちどは途方にくれたが、蕭照がひと晩じゆう膝ぐみになつて、噛んでふくめるように話したことを彼等もどうやら理解して、幾年か後には鳥獸の世間でない人なかの世間に於いて、おたがいに明るい話題を持つて会おうじやないかと約束して散々ちりちりに分れた。

冬も、小堂の師弟は、この山中に一穗すいの灯を点じ雪のふる夜も画道に精進していた。

それからの師弟の足蹟は、数年間、分らなかつた。

南宋となつてから世も暫しばらく小康がつづいた。天下の名画を蒐あつめた徽宗の宣和御府せんなぎよふの儲ちよぞ蔵うも、往年の乱で大部分は散逸さんいつしたが、臨安の新都には、中興館閣儲蔵の制がふたたび設けられた。また宣和画院にならつての画院制も復興された。

北宋の代にまさる芸術の華はなが、ふたたび南宋の御府に研けんを競わんとする風を示した。が、それはやはり民衆の生活とその繁榮とは縁もなく発達してゆきそうであつた。心ある人は、

かくてはやはり南宋の泰平も、その芸術の殿堂も、久しからずして北宋や唐や漢代の轍てつを  
ふむものではないかと、どこかで危ぶんでいたことであるだろう。

が、芸苑げいえんの春はともかく南宋画時代を出現した。その中に、八十歳を超えた李唐も画  
院に召されて都へ帰っていた。またその李唐の推薦すいせんに依って、蕭照なる一作家も新あらたに画  
院の一員に列していた。

季唐はもとより徽宗きせう以来の大家たいかではあり、晩年にも長巻や大作を描いて、いよいよ北宋  
画の宗そうたる巨腕を示したが、その門から出た蕭照も、年も趁おうて名声を博し、その作品は、  
李唐以上に、時人に重んぜられた。

中国の画壇は、以後も梁りょう諧かい、夏珪かけい、馬遠ばげん、馬麟ばりんなどを輩出したが、しかもなお徽宗  
から李唐、蕭照あたりまでの期間をその黄金時代であつたと史家も回顧している。そして  
山水さんすい訣けつの著者のごときも、蕭照は李唐から出て李唐にもまさり、董源とうげんの皴しゅう法ほうを倣なら  
つて董源よりも適しゅう勁けいであるときさへ評している。

彼の作品としては、現に虎丘図巻や山居図巻などが遺のこされており、日本画大成の中国篇  
に収載されてもいる。そしてただ南宋の一世代のみでなく、その仕事は長い生命を人類の  
中に持った。



それに反して、南宋百五十年の治世も、また元となり明と変遷<sup>へんせん</sup>し、大きな世乱はなぜかその後も同じような世転の過程をくりかえして来ている。いったいこれは人間共同のやむを得ない法則なのだろうか。一箇の人間の場合では、一片の発心<sup>ほつしん</sup>を絵筆にこめてさえ、かくも長い生命のものを、どう世が変わっても決して、禍<sup>わざわい</sup>を人類に及ぼさない文化的遺産として、香り高く、この地上に遺<sup>のこ</sup>し得ているのに。

(昭和二十二年五月)



# 青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・㊦ 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「東京 創刊号」

1947（昭和22）年4月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人間山水図巻

吉川英治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>